



不可逆的な変化

(変化してしまったものに対する挑戦)

(7月のごあいさつ)

平成30年7月2日(月)

1885年9月のプラザ合意による**大幅な円高**(1ドル260円から150円へ)は、2008年9月のリーマンショックの80円を経て、現在まで110円程度の**円高状態**が続いている。これに伴い、民間企業の**国内投資**は、リーマンショック前の約75兆円から60兆円台と減少し、**対外投資**は、5兆円程度から18兆円と増大した。これは、日本の大手企業がプラザ合意を受けて、次の本格的な円高到来に備えてきた結果とすることができる。

国内投資の不調は、国内の企業数の減少となって現れ、2015年末に4,025千社あったものが、2020年末△10.4%の減少で3,607千社となり、2025年末△10.2%の減少で3,197千社と減少傾向が続くことが予想されている。これに伴い企業の営業利益率の横這い、従業員給与の低迷が続くことは明らかである。

約2年前、経済界の講演で、当時の一般企業の**営業利益率が約4.0%**で、**調達金利が1.5%以下**であるのに何故、国内の投資が振るわないのか不思議であるという話を聞いたことがある。確かにケインズの流動性選好理論によらずとも、**投資の限界効率(企業利益)**が、**利子率(銀行金利)**を上回れば、企業の投資は行われる筈である。また、投資の受け皿という側からではあるが、中国など東南アジア諸国は、外国からの**海外投資**を活用して活況を呈している。

何分それは日本経済のことで、当地沖縄では投資や景況が活況を呈しており、単純に日本の将来に対する不安か、あるいは海外に比較して**国内の投資の魅力**が低いということがそのようにさせるのかと思っていた。しかし、大手企業が円高に対して**海外投資**や**海外生産**を拡大して対策をしているのに対し、国内、特に中小企業にとっては、**時期を失している**感がある。既に**変化の起きてしまった不可逆的な事象**に対してどのような挑戦があるのであろうか。

アベノミクスの**経済浮揚効果**が十分に発揮できていないことや日銀の**インフレ誘導政策**の効果があがらないのも、この空洞化してしまった**不可逆的な変化**に対する**方向違いの挑戦**を行っているためではなかろうか。これでは百年河清を俟つ、いつまで経っても成果は期待できないのではなかろうか。